

---

# コックローチと恋心

川崎真人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コックローチと恋心

### 【Nコード】

N8564Z

### 【作者名】

川崎真人

### 【あらすじ】

人間になつたゴキブリに恋をした。  
そんな一夏の物語です。

(前書き)

アクセスありがとうございます。

みーんみんなだとか。

つくつくぼーしとかも好きだが。

中学二年の夏休み。万里がもつともエレガントだと思うのはなんといいてもひぐらしの鳴き声だった。うだるような暑さに沈んだ万里の耳を、琴を奏でるようなその鳴き声が清涼に揺らす。

籠るような高温は万里の脆弱な思考回線を容易くショートさせた。涼しい午前中はクーラーの使用を禁止するという、出張中の両親から課せられた鉄の掟を律儀にも遵守し、団扇を振るう体力すら持たずシャツ一枚で横たわる万里にとって、耳朵を打つセミの声と古い畳の感触だけが全てだった。

そんな時だった。

がつん、と、ガラス戸を叩くような猛烈な音が万里の耳朵を打った。

顔を真っ赤にしひいひいと息を荒くし、なまめかしく白い足でガラス戸を蹴りまくるその女は、白衣の下には何も纏っていないかった。ドン引きである。

……ばんりー。……ここをあけるー。……あついしぬー。窓の向こうからやたらと切実な声が響き渡ってくる。だがしかし家を出る時母親は言ったのだ。怪しい人を家の中に入れてはいけないよ、と。「このあたしを熱中症で殺す気が……てえおい。鍵開いてんじやねえかこれ」

ばたばたと騒ぎながら万里の部屋に入って来たのは、千原家の近所に住んでいる女子大生の天沼切子だった。隠し切れない豊満なボディをサイズ大きめの白衣で覆い、右手には幼稚な水鉄砲、左手に葉大きな紙袋を手にしている。白衣の下にはノーモア衣類。……下着くらいは着けていると思うが。

「ていうかあつ。この部屋あつう！クーラークーラー。クー

ラー付けようぜ十六度」

あまりの格好に慄く万里にお構いなしに、切子はエアコンのスイッチを入れた。宣言どおりの最低温度、節電節約おかまいなし。怒られるのは万里なのだが。

「暑いのは分かるんですけど、だからってそんな格好で外を出歩くものじゃないでしょう。だいたい白衣ってことは、また変態染みた発明品でも作って来たんですか？」

「あら。気付いた」と、自分の工作を見せ付ける子供のような表情。手に持った水鉄砲を掲げて見せた。

「これ。すごいのもこれ」

「すごい……と言われても」

にひひ、と笑ってみせるその姿に、万里はどうやったって敵わない。抵抗する気も失せてしまつて、ただただ溜息をつくばかり。

この天沼切子という女には妙な才能めいたものがあつて、ノイロ―ゼ気味の神様が与えたそれは発明の才。この女が富士山を破壊する装置を発明したと言い張るならばそれはおそらく確かなのだろうし、地球の回転を逆にする方法を編み出したと言いつ出すならば、地球人類全員で彼女を拝み倒してやめてもらわなくてはならない。天沼切子はだいたいそんな、冗談みたいな女なのだった。

「その水鉄砲がそれなんですか？」

「まったく如何にもご明察。これから試すから見といてね」

ええーととうーんとどこかなどれかな。切子は部屋中歩き気回つて、自分の発明の実験体に使えそうなものを探し始めた。

「やった！ 見付けた！ これにしよおつと」

語尾に音符かハートでも付けそうにそう呟いて、切子は自分の足を元をいとおしそうな目で見詰める。何を始めるのかとその場を覗き込んだ万里は半ば絶叫。ぴゅるぴゅるうごめく二つの触角、三対の足に茶黒いボディ。それはいわゆるゴキブリで、万里はこれが大苦手だった。その存在を目にするだけで身の毛がよだち、足元を這うようならば失神することも辞さない所存。そんな万里の様子を見な

がら、切子はどこかたくらむような顔をして微笑んだ。

「それじゃ。さっそく、装置の効き目を試してみましようか」  
「いったい何が起るといふのだろうか。巨大化や増殖だけはやめて欲しい。頼む……頼むからそれだけは……などとそう思った万里が目にした光景は、あまりにも意外なものだった。」

「……へ？」  
そこにいたのは万里と同じくらいの年頃の少女だった。最早沸いて出たとしか形容しがたいその出現に目を覆う。どこか生気の感じられないぼーっとした少女の肌は白く、整った顔立ちは限界まで弛緩して虚ろでさえあった。

耳を前方から覆う二筋のサイドの髪は触角めいて異様に長く、小鳥の血を塗ったような唇や吸い込まれそうに深い瞳に、万里は思わず釘付けになる。

不自然な点は数多くあった。彼女が一切の衣類を身に着けていなかったり、そもそもどうしてこの場に出現したのか分からなかったり。しかしそんな些細な疑問符を一切合財吹き飛ばしてしまう美しさを、その少女は備えていたのだった。

「そおい！」

切子は突然動いた。目を開けたまま意識を失ったかのようなその少女をひつとらえ、持って来ていた紙袋の中から取り出したるは無数の衣類。男物も女物も入り混じったそれらから適当なものを即座に選び、裸の少女を羽交い絞めにするように着せていく。

そこで少女の体が動いた。危険を感知した小動物のように、表情を恐怖に歪めて飛び上がる。体を擦じらせて切子の両腕から逃れたかと思うと、万里の脇をすり抜けるようにして部屋の外側、リビング方向へと走り去っていった。

「なんなんですか？ あれ！」

あせったのは万里だった。切子は愉快そうに鼻を鳴らしながら万里の方を向くと、憎たらしい程に邪気のない笑みを浮かべた。得意げだ。

「さっきのゴキブリはどうしたんですか？　あなたはいつたい何を……」

「ゴキブリなら逃げて行った今の子がそうだよ」

切子はこともなげにそう口にする。万里は意味が分からず目を丸くする。

「あたしが作ったのは、動物を擬人化させる装置ね。擬人化つてか人間の体を与えるっつーのが正しいんだけど」

あまりのことに万里は絶句した。

「……ゴキブリが？　さっきの？　女の子になったって？」

「そ。しーいずこっくろーち」

万里は大きく溜息を吐いた。相変わらず訳の分からない装置だが、それでもまだマシな部類に入るじゃないか。少なくとも、日本列島を沈没させるような代物ではない。

「一応。変に欲情しないように服は着せといたけど。まあ何にせよ見に行くよ！　ほら」

その前にあなたが服を着てくれ。思うが口には出せずに万里達二人は部屋を出た。女の子はリビングの中央に座り込み、自分を纏う服と格闘している。きつと邪魔なのだろう。

スカートはぶっ千切られてそこいらに転がっていて、頭に引つかかった上着から白い両腕が飛び出している。「あらら」切子は一言そう呟いた。

万里達が近付いて来たことを気配で察したのか、女の子は頭に上着を引つ掛けたまま飛び上がった。そのまま凄まじい勢いで走り去っていきこうとするが、そこをすかさず、異様に巧みなタックルで切子が押さえ込む。

「へいゴキ子ちゃん。この後に及んで逃げる訳？」

万里は慌てて目を逸らした。ストリップショーの最中に上着が引つかかったような間抜けな少女と、下着の上から直接白衣を纏った変態の女が、自分の家でもつれ合う光景を見せられた十四歳としてはまあ健全な反応だ。

っていつかゴキ子ちゃんってなんだよ……などと思っていると、切子は先ほどの水鉄砲を取り出した。それを女の子……ゴキ子の頭に突きつけると、スイッチを入れて光線を発射する。

「何をするんすか？」

「ゴキに戻す方の実験」

青色とも紫色ともつかない不思議な色の光線は、ゴキ子の全身に迸り覆い尽した。あんなものを全身に浴びたらそりゃあ人間にもなるだろう……などと感嘆していると、ぼかーん。とあまりにも間抜けな音色が響いた。

「どうしました」

ぷすぷすと煙の吹くような音が鳴り、切子の手先から一筋の灰が立ち上る。切子はかわいらしく舌を出しながらこう言った。

「うん。想定外」

切子を突き飛ばして逃れたゴキ子はまたたくまに上着を脱ぎ捨て、かわいらしいピンクの下着だけになると万里の脇をすり抜けて走り出す。

万里は切子を助け起こしながら視線で尋ねる。いったいあなたは何をやらかした。

「いやね。いったん人間の格好にしたのにこれを使えば、元の姿に戻るはずなんだけど……」

先端がひしゃげてあるうことか煙を吹いている擬人化装置を見せ付けて

「壊れたの。もう使えない。つまり、あの子をゴキブリに戻せない」

「何やってんすかあんだ！」

「ごめん……流石にこれは想定外だわ」

「ごめん……ごめんマジごめんホントごめんどうしようやばいわこれやばい……言いながらその場でうな垂れる。」

とにかくあの子を見ていないといけない。万里は思った。ペしゃんこにうなだれた切子はやむを得ずその場に残し去り、たったか駆

けてゴキ子の姿を探して家中を走り回った。

ガラスでケガをするからもしれないし、コンロで火傷をするかも知れない。心配しながら自室へ飛び込んだ万里が見たのは、ガラス戸へと寄りかかるゴキ子の姿だった。

「ねえ君。そこは危ないよ。こっちにきな？」

言葉が通じるかどうかは分からない。だがしかし、万里は精一杯優しい声を出した。対するゴキ子の答えは、表情を蒼白に歪め震えたような声で発したただ一言だった。

「こないで」

見るもの全てに怯え切ったようなその表情に、さしもの万里も凍りつく。万里を見詰めるどこかしら空虚な二つの瞳は、ぞっとする程底なしに暗い。

この子はやっぱり人間じゃないんだ。万里は心からそれを痛感した。

がたがたと全身を震わせながら小さな両手でガラス戸を開き、ゴキ子は逃げるようにして去っていく。万里は急いでそれを追いかけた。

「すいません！ ピンクの可愛い下着を着けて、ものすごい勢いで街中を走行する、十四歳くらいの美少女を見かけませんでしたか？」などと聞き込みを行ったところで、得られた反応は怯えられるか引かれるかのどちらかである。搜索は苦渋を極めるものだった。

元がゴキブリだっただけのことはあって、ゴキ子の脚力は人間離れしたものがあり、あれから万里は簡単に彼女を見失ってしまった。そのうち息もあがってきて、膝を突きへたり込んでしまう。

それでも諦める訳にはいかなかった。思い出すのは、ガラス戸から逃げ出す時にゴキ子が浮かべたどす黒の瞳。人間離れして暗く、何かを諦め切ったあの表情を目に浮かべると、説明しようのない寂寥が万里の胸にこみ上げた。どちらにせよ、ほうっておく訳にはいかないのだ。

万里は駆けた。息を荒げながら必死で尋ねるシャツとパンツの少年を、人々は不気味に思ったことだろう。彼らから得たヒントを元に、探し回ること二十分、万里はついに、ゴキ子の姿を発見した。それは橋の上だった。柵のところまで追い詰められて、高校生くらしいの男達に取り囲まれている。ゴキ子の表情はぞつとする程冷ややかだった。

年頃の娘が下着姿で外をほっつきまわれば、こういう結果になるのも無理はない。人間の世界は危険が一杯で、何も知らないゴキ子はあまりに危うい。

万里は迷わず橋に向かって突っ込んだ。見るからに柄の悪そうな高校生の連中は、そんな万里を威嚇するような目で捉えている。猿のように眉間に皺を寄せたその表情は、万里を怯ませるのには十分なものだった。

「なんだよ」

ただのなんでもないその一言が、幼い万里にはあまりにも重たい。しかし連中の真ん中で全身をがたがたと震わせているゴキ子を見ると、何があってもここから離れる訳には行かなくなった。

「彼女を放してやってくれませんか」

万里は無謀にも交渉を試みた。

「何も分かっていないんです。彼女、ちょっと変つてて……」

「うるせえな」

一人がゴキ子の触角めいた長髪を掴んだ。そうすると、ゴキ子は目を見開いて両手を振り回し、男の腕から逃れようとする。悲痛を極めたその表情は、深い恐怖と憎悪に歪んでいた。万里がそこに駆け寄ろうとすると、別の男が前に立ちはだかった。

「だから後腐れがないんじゃないか。ここから落とすぞ」

「お願いします」万里は頭を下げた。「何でもします。彼女に何もしないでくださいませんか」

これが万里にできる精一杯だった。顔面蒼白でただただ頭を下げるのみ。高校生三人を相手取って敵う理由はどこにもない。だから

必死で願います。それが通じるとは限らないけれど。

「土下座しろ」

男の一人がなんともおかしそうにそう言った。万里は淡々と膝を折り、地面に頭をこすり付けた。「生意気なんだよ」男は万里の頭を踏みつける。手が空いていたもう一人の男がそんな万里の様子に爆笑する。何も言わず、微動だにせず、懇願を続ける万里の様子を、ゴキ子は呆然と眺めていた。

「おい。おまえ」

ゴキ子を捕まえていた男が言った。

「こいつの何なんだよ？ ええ？」

その時、がむしゃらに暴れまくっていたゴキ子が男の腕に噛み付いた。「いてえっ」突然の攻撃に男の表情が苦悶に歪む。ゴキ子はすぐさま男の腕から逃れると、万里の方を一瞥してから、柵の方へと大きく頭を振るって背を向けた。

「おい……おいおまえ何すんだよっ」

男の制止を気にも留めずに、ゴキ子は柵を乗り越え川に向かって飛び込んだ。あまりの事態に万里が頭を上げた瞬間、彼女の水に叩き付けられた音が響いた。

「おいおいマジかよ」

「結構高いんじゃないの、これ？」

万里はそこで立ち上がり、柵に向かって飛びついた。綺麗に澄んだ水面には、驚く程何も浮かんでこない。ただ蒼白な顔をした己の面が、映し出されているのみだ。

「はああああ？」男の一人が頭を抱えた。「マジで言ってるの？ バツカじゃねーの。俺、しーらね」

万里はいよいよ心配になり、ほとんど柵を乗り越えるようにして水面を覗き込んだ。すると、いくつかの水泡を吐き出しながら浮かび上がる少女の姿が現れる。両足を無益にはたばたと振り回し、大量の水を飲みながら今にも沈んでいきそうにもがき苦しむその様子を見て、そこで万里は覚悟を決めた。

「おい」男の一人が口にした。「やめとけよ」

万里は川に飛び込んだ。血が逆流するような浮遊感どこか心地良くもあり、それと同じくらい恐ろしい。息が詰まるような衝撃と共に、水飛沫をあげながら万里は水面に叩き付けられた。

水中に沈みながら見たゴキ子の表情は、本当に無垢であどけないものだった。一刻も早く彼女を安心させてあげようと、万里はとにかく水面に浮かび上がると、ゴキ子の体を抱えて泳ぎ始めた。

ゴキ子の細くしなやかな体は、万里に何の抵抗も示さなかった。ただただ頭に疑問符を浮かべ、目を丸くして万里を見詰める。小さく無邪気なその顔が、万里にはなんだか可愛らしかった。

「なんでたすけたの」

川岸にたどり着いてゴキ子が最初に口にしたのはそれだった。

人を一人背負って泳ぐ行為には相当な体力が必要だった。ゴキ子がおとなしくしてくれてくれなければ、おそらく二人とも溺れていただろう。水を吸ったシャツを脱ぐことも絞ることもせず座り込み、必死で息を整えながら万里は言った。

「そりゃ。……溺れてたからだろ？」

ゴキ子は首を捻った。何を言ってるのだろうこの人は、とでも言うように。

「水が苦手なんだろうな。酷い溺れっぷりだったもの」

「なんでたすけられたのかわからない。わたしたすけても、あなたに何の得もないし。意味ないし」

「そりゃあゴキブリの世界ではそうだったのかもしれないけどさあ」

万里は苦笑した。

「人間って言うのはそういう生き物なの。自分と同じ形をした奴が死にそうに溺れていたら、どんなに無益であっても助けたくなるの。というかそれ以前に、俺はおまえの保護者というか責任者な訳」

「じゃああんた誰」

ゴキ子はつつけんどんにそう尋ねた。

「千原万里」

万里はにやにやと嬉しげにそう答える。ゴキ子はちよんと首を傾げた。

立ち上がり、万里はゴキ子に手を差し伸べた。ゴキ子はその手を意外そうな、ありえないものを見るかのようにぎよっと見詰める。万里は少し困ったような顔で笑った。

「家に帰ろう。いくら季節が夏だって、そんなずぶ濡れじゃ風邪引いちまう。こうなったらしばらく面倒は見てやるよ。飯だって食わせるし、風呂にだっていれてやる」

「飯……ごはん……」

ゴキ子は差し伸べられた手から目を逸らし、ほんの少しだけ寂しそうな表情で話し始めた。

「わたし、あなたの言うことがわかんない。信じられない。さっきなんて、わたしと一緒にしにかけた。ねえ、どうしてわたしに「ごはん」はくれんの？ どうしてそんなに優しくしてくれんの？」

無邪気なそれらの質問が、万里にはとても痛々しかった。万里は安心させるように微笑んで、優しく手を差し伸べ続けた。自分ができること、すべきことは決まっている。

「なんとなくだけど。俺から逃げてたおまえの瞳が、悲しいくらいどろどろだったから。せつかく可愛い顔してるのによ。少しはマシにしてやりたかったんだ」

そこまで言って万里は苦笑した。自分でも良く分かっていないよ。うなこの感情を、急ぎ立てられるようなこの気持ち、増してや人間になったばかりのゴキ子に伝えられるとは思わない。だけど。

ちよこんと。おずおずと。差し出した万里の手のひらに、ゴキ子の小さな手が重ねられる。求めるようにゴキ子の指が絡まって、ぎゅっと握り締めたタイミングはほとんど同時。手を繋いだ二人は気がつけば見詰め合っていて、先に口を開いたのは万里だった。

「……来てくれるのか？」

ゴキ子はちよんとうなずいた。

「ばんりを信用することにする。ばんりは味方、わたしの味方。そんなのってふつうありえないと思うんだけど、ばんりはばかだからそういうこともあるってことにする」

濡れそぼった顔は真剣で、潤んだ瞳で万里の姿を真つ向から捉えていた。力なく伸びた触角めいた二筋の髪、細い手足に神経質なその体は、どこか安心したように弛緩していて、万里はちよつと嬉しくなった。

どす黒だった大きな瞳は透明で、万里の顔を明瞭に映し出していた。

女の子を家に同居させている、とか。

その彼女は家にいる時はほとんど全裸で下着しか着けていない、とか。

そんなことを出張中の母親に報告する訳には行かず、受話器を握る万里の手の平はだくだくの脂汗でぬめっていた。『しっかりしてるー？ 悪いことしてないー？』などと近況報告を求めて来るかーちゃんに、絶賛裸の女を家に連れ込み中の息子は胃に穴が開きそうな気持ちでいた。

背後ではとうのゴキ子が大声で「あはははははははは」とアホ丸出しの声で叫んでいて、フライパンの中に直接醤油やら味噌やら捻じ込んでいる。「バカ！ やめる！」絶叫した声が母親に届いて『あんた本当大丈夫？』どこか心配げな声でそう尋ねられる。「ううん母さん。別になんでもない、友達が家に来ているだけなんだ」息子が苦しい言い訳をした次の瞬間、フライパンからは凄まじい量の火炎が爆発としか言いようのない勢いで吹き上がり、「ふおおおおおお！」受話器から手を放してアホ女に向かって出撃。『ちよつと万里ー？ 何やってんの万里』能天気な母親の声を受話器からむなしく響いていた。

「何やってんだよゴキ子でめえ！」

万里があわてて火を消すと、ゴキ子は口を尖らせて

「創作料理だつてば」

とふざけたことをのたまった。

「頼むからおとなしくしてろ。て言うかそんな格好で火なんか使つて危ないぞ」

少し前までは火どころか鏡にすら怯えていたゴキ子だというのに、よくも料理なんか覚えたものだ。フライパンの灰色めいたこのどろどろが、これがはたして料理なのかどうかには首を傾げる他ないが、驚くべき順応の早さだとは言えた。未だに服は着れないし、風呂にも一人で入れないが、それはともかく。

「ええー良いじゃない良いーじゃないやらせてよねーねー食べれるよーおいしーよーほんとだよー」

無邪気を極めたにこにことしたその表情に、万里は軽く頭を抱えた。どんなに物覚えが早くとも、アタマは所詮虫並か、と。受話器からは母親の声がかましく響き渡っているし、かといって料理をやめさせなければ小火が出る。

「たべてみてよーねーばんりー。おいしいよ？ 良い出来だよ？」身をくねらせて擦り寄つて来る発育の良いゴキ子に十四歳少年は多いに困った。だがしかし人間初めて十日と少しの無垢なる顔を、そうそう裏切れる気もしない。フライパンの中にぞんざい指を突っ込むと、灰色めいたその液体をなめた。

万里の頭の中に二対の天使が舞い降りた。

『食』をつかさどる天使と『快樂』をつかさどる天使の二対は、万里の頭の中でラッパを吹きながら回転し、彼の心の中に大いなる変革をもたらしした。

おお、神よ。心の中で万里は叫ぶ。人類はとんでもないものを作ってしまった。この虫けらから進化した無垢なる少女は、もしかすると、この料理を作る為に生まれてきたのではなかるうか……。

「どうだったー。ばんりー」

にこにこと問いかける少女の形をした才能の塊を、万里は感動し

たよつな視線で見詰める。そしてこう言った。「それ、今日の朝食に使うからな」

「うん！ でもまだ未完成だからちよつと待ってて」

それを聞いて、あまりのことに万里は絶句する。まさか……この先があるとしても言うのか……。究極を越えた究極というものの存在におののきながら、しかし忘れてはならない。万里は受話器を手に取った。

「ごめんごめん。ちよつと友達と揉めててさ」

『あらそう。もしかして泊まっていったの？』

こんな朝にいる友達なのだから、まあそういうことにした方が賢明だろう。

「そうそう。ほとんど寝ないで遊んでたよ」

『宿題もちゃんとしなさいよ……』って、あんたにその心配はいらないか。何にせよ、変な遊びは覚えないようにね。体には気をつけなさいよ』

「母さんこそ。しっかりと働きなよ、体を大事にね、年なんだから」

『あら。女は百歳まで女なのよ。母さんはその半分もいつてないんだから、大丈夫よ』

軽口を叩きあい、「じゃあね」「あいよ」電話は切られた。万里はまず安心し、それからしばらくぶりに母の声が聞けたことを喜んだ。息子がちよつとセンチメンタルになりかかったタイミングで、優しき母は電話をかけてくれたのだ。

「ばんりー。できたよー」

そう言つて振り返つた先ではフライパンが直接テーブルに置かれていて、中では炊き立ての白米が灰色の液体にだくだくに浸かっていた。リゾットとかその辺の料理のつもりらしい。歪な形に切断された何種かの具剤が放り込まれていて、見た目は正直若干えぐい。

具剤はいつのまに調理したのだろうか……思いながら、万里は席に着いた。今までは基本的には万里の二トト的な存在だったゴキ子だが、それが始めて役にたったのだ。やらせてみれば案外できるも

のである。

しかしながら。万里は思う。冷蔵庫の食材と一緒に歯磨き粉の手ユープやら洗顔料やら、混ぜるな危険のカビ取り洗剤なんてもので並べられているのは、いったいどういうことなのだろう。若干の不安を抱きつつも、無邪気に席に着くゴキ子の笑顔を裏切ることができなくて、万里は味だけは最高のその料理に手を付けた。

そして万里は腹を壊した。

トイレに一時間半程閉じこもり空ろな表情で蛍光灯を見上げてみると、今度はお迎えの天使が何度となく現れては万里を連れ去ろうと試みた。しかしながら、ケツを晒して便座に腰掛けながら変死を遂げるなど万里は意地でもごめんであって、万里はひたすらがんばった。これはもしかすると、病院に行った方が良いのではないか。

なんとか落ち着いて部屋に帰り着いてみると、全ての現況はテレビの前で無邪気にぶよぶよ等に興じていた。どんな名人にも匹敵するような素晴らしい速度で十九連鎖を積み上げる様には感嘆するが、しかし相手の画面を一瞥もしようともしていないので、着火点を簡単につぶされて負ける。「うがああああ！」コントローラーを振り回しながらもだえているのは悔しいのだろう。

まだ少し傷む腹を抱えながら、万里は携帯電話を手を取った。友人からの着信メールが一件。学校では万里がもつとも仲良くしていた男からだった。

アホみたいに絵文字顔文字感嘆符が使われたそのメールを要約すると、部活の合間に時間ができたから今からおまえんちに向かう、というものだった。向かいたい、とか向かうけど良い？ とかそういうのじゃなくて『向かう』とはつきり締め括られたそのメールの送り主は体育会系。去年は一年生でレギュラーになり、野球部を地区予選決勝にまで導いた猛者である。

そんな訳で。万里は軋んだロボットのような動きでゴキ子を見やっした。下着姿でひたすらぶよぶよをやっているうら若き乙女、心地

悪いから外出する時以外は服は着ない主義という彼女を見詰め、呟くように声をかけた。

チャイムの音がした。

スカートまでは履かせることができていたのに、万里がそれに意識をそがれた隙にゴキ子はさっさと逃げ出してしまつ。「あ。こら」叫ぶ万里に「ベー」舌を出して見せるのは生意気な娘。友人には親戚の女の子とでも説明することになりそうなゴキ子。

とにかく友人を待たせる訳には行かないので、ゴキ子にはしばらく走り回ってもらつことにして扉を開けた。

「いよう！」

現れたのは、十人の女をいっぺんに魅了することのできそうな、輝くようなハンサムスマイル。青みすら帯びたような白い歯に、浅黒く焼けた肌にしなやかな筋肉。この男が万里の親友であり野球部のエースの碓元忠人だった。

「ひさしぶりだな万里。返信だけじゃなくてそっちからもメールくれよー。寂しかったぞ」

人懐っこい声でにじり寄つて来るハンサム面に、万里はあくまで苦笑を返す。「ごめんごめん」と口にしてみると、まあ良いつてことよ的なニュアンスの「あっはっはっは」という爽やかな笑いごとどろいた。

再開を喜ぶように万里の肩を猛烈に叩く。ばしばしと、念入りにその余念のない愛情表現に、万里の頼りない両肩は大きなその手に潰されそうだ。

「痛い、痛いつて」

「おうおうすまない。いやあっしかしひさりぶりだなー。大会終わったら一杯遊ぼうぜー釣り行こうぜ釣り」

「そうだね」

と、万里は内心びくつきながらそう言って応答し

「こんなところで話すのもなんだし、とりあえず部屋にあがって

いてくれよ。すぐ戻るからさ」

にこにこしながら万里は忠人を部屋へ追いやった。まったく、どうして自分の周りにはこんなにも、元気が良いのが多いのだろう。

とにかくだ。万里はリビングでたむろすゴキ子の前に現れた。断固として服を着ようとしないうその娘は、口を尖らせて万里の方を見た。

「なに？ あいつ」

「俺の友達」

万里は諭すようにそう口にした。

「すげえ良い奴だから安心してくれ。そして頼むから服を着てくれ。万が一裸のおまえとニアミスしたら、なんて説明したものか」

「やだ」

ゴキ子はペリカンのような口で

「家の中では下着だけでいーって言った。それにわたしはばんり以外は信用しないもん」

わがまま娘に溜息を吐いて、どうしたものかと首を振る。このままゴキ子を一人にするのはから恐ろしく、部屋にいてもらう為には服を着せて忠人と打ち解けてもらわねばならない。どちらも同じくらい難しいミッションであると言えた。

「頼むから。半日だから。お願いだから服を着てくれ。そしたら部屋にいて良いから。ぶよぶよやって良いから!」

そう言って上着とスカートを抱えてじりじりとにじり寄る万里。

一方ゴキ子はすぐさま逃げを打つ体制を整えた。俊敏な動きで万里の脇を抜けようと試みるが、それは予想済み。素早く動いて彼女の進行を食い止める。

「きゃー。きゃーいやーっ」

「へっへっへ。楽しいお着替えタイムと行こうじゃないか。へっへっへ」

そうして万里はゴキ子の体を羽交い絞め。じっくり体をロックして、スカートから順に履かせて行く。そうした場合、どうやったっ

て見たたり触つたりすることになるのが、皿の上のプリンのように柔らかい尻であつたり、すべすべとしなやかな腰であつたり胸であつたりする訳だ。

「げっへっへえ。ゴキ子ちゃあん、離しはしませんよお」

思考が邪な方向に流れていってしまいそうになるのに耐える為、万里は必死でアホになっていた。ゴキ子はというと悲痛な声色で「きゃー。いやー」と叫ぶばかりだ。服を脱がしているのではなく着せているのに、なんだか妙な気分になって来る。そして不安定になる自分自身を強く律する為に、万里はあえて「げっへっへ」などと口にするのだ。アホである。

逃げ惑うゴキ子にスカートを着せる作業は苦渋を極めた。何せゴキ子は逃げるという行為に対して言えばまさしくプロフェッショナル。アホにならなきゃやってられない。暴れまくるゴキ子、羽交い絞めにする万里。「おおーい万里何やってんだー」そこにやって来た第三者、碓元忠人。

「……………」上半身裸の見目麗しい少女に覆いかぶさり両足を抱え、スカートを掴みながら万里は沈黙した。

「……………」上半身裸の見目麗しい少女に覆いかぶさり両足を抱え、スカートを掴んでいる親友を目の当たりにし、忠人は沈黙した。ゴキ子はその隙に万里の腕から跳ねるようにして這い出した。怯えたように忠人を一瞥してから、万里の部屋の方へと逃げ去った。

「ちよっ。待てよ、ゴキ子……………」

慌てて追いかけてよとすると万里の肩を、忠人の大きな手の平がぎっしりと引き止めた。

「なあ。万里」

その表情は、大きな信頼と僅かな不安、それから少しの冷や汗とで構成されていた。

「ちよっ……………説明してもらいたいんだけど」

千原五季子。十四歳中学二年生。

万里の親戚の女の子で夏休みで内に遊びに来ている。家の中にいる間は服を着たがらないという困った性格で、忠人が来るに当たって自分が彼女にスカートを穿かせていた。そこを忠人が部屋でいてくれと自分が行ったのにどういふ訳かリビングルームに登場し、間の悪い光景を目撃してしまったのだという訳だ。

ゴキ子が人間暦十日と少しの元ゴキブリであるという点を除けば、大方正しい説明である。それなりに聡明でありかつあまりにも愚直な忠人は、そんな説明に納得したようだった。

「おおいゴキ子ちゃん。怖くないからこっちにおいでよ」

優しいげに手を伸ばす忠人だがゴキ子は怯えたように体を震わせ、跳ねるような動きで万里の後ろへ逃げ去った。人から拒絶されることに慣れていない忠人はへこんだように目を伏せて、「怖くないのに……」ちよつと哀れになりそうな声で肩を落とした。

ゴキ子は未だに万里以外の人には馴れないのだ。これまで人を一人も家に招かなかつたのも、彼女のことを慮つてのことである。

「ほうらゴキ子ちゃん。おれが今からすっげえおもしろいことをしてやるからさ。だから来なよ、ほらこっちに来ておもしろいことを見てくれよ」

にこにこ笑つて忠人はゴキ子に近付いていく。万里の後ろでゴキ子はただただ身を小さくし、怯えたように万里のシャツを握り締めるばかりである。後一メートル近付いたら逃走を始めるといふ絶妙なラインに近寄つて、ゴキ子の心を開かせる為、忠人がぶちかましたのは以下のようなギャグだった。

まず最初。忠人はその筋肉のついた背筋をぴんと伸ばして手を拳げる。両手を合わせて天井に掲げ、それから頭ごと上半身をほんの僅かに左側に傾けると、どこかしら自信に満ち溢れた声色でこう絶叫した。

「六時二分！」

ゴキ子の全身から血の気が引いたのが万里には分かった。体全体を時計に見立て、下半身を六時の方向に、上半身を左側に僅かに傾

けて二分を現すという。体を張ったそのギャグは、時計の読み方を知らないゴキ子にとっては、まったく持って意味不明な代物だろう。

「ひーん……」

さぞかし恐ろしかったに違いない。不気味に思ったに違いない。泣きそうに怯えるゴキ子を万里は必死で慰めた。優しい表情で頭をなでてやっている万里の背後、「マジで？ つまんなかった今の？」不覚を呪うアホがいた。ちょっとこれは……弁護のしようが無いと万里は思う。

忠人なら、まだしもゴキ子の心を開かせることができるんじゃないかと、万里は少し期待していたのだが……。

嘆く忠人。怯えるゴキ子。慰める万里の胸元で携帯電話が着信音を鳴り響かせて、出てみるとそれは切子からの着信だった。

「やつほー万里」

切子は明るさを装ったような声でそう言っ

「ちょっとゴキ子ちゃん連れてきてくれる？ ゴキ子ちゃん元に戻す時壊れたあの時の装置、なんとか修理ができそうだから……」

万里は、悩んだ。

悩んだ末に、判断は保留することにした。そもそもこれは、自分一人の問題でもない。

ゴキ子連れて隣の切子の家に行こうとすると、忠人も当然のように一緒に付いて来た。近所の美人のおねーさんとして、忠人は切子のことをほとんど敬愛していたし、万里もそのことを知っていた。

「いらっしやい」

これと言った意味もなく白衣を身に着けるのは切子の癖で、なんとなく気が引き締まるということだった。その日は下着に直接羽織るといふこともなく、ふつうに服を着てまともな格好で万里達三人を迎えてくれる。

「おひさしぶりねゴキ子ちゃん。万里に何かされてない？ 嫌なことがあつたらおねえちゃんに何でも言ってみな？ うん？」

ゴキ子はその場で俯いた。逃げ出さないだけマシかもしれない。天沼家の応接間は異様に広く豪華であって、出されるお菓子も一味違っていた。切子はゴキ子に近付くと甘いお菓子を一口ずつ彼女に与え、怯えながらも誘惑に勝てないゴキ子がそれを口にする。そしてその味がたいそう気に入ったらしいゴキ子が顔を上げると、満面の笑みの切子がそこにいた。二人はすっかり打ち解けていた。

「おれの方は笑いもしなかったのに……流石は切子さんっす」

忠人が感心したように首を振る。万里は苦笑した。ゴキ子を手なずける方法で一番手っ取り早いのは食い物。これは記憶しておかなければならないだろう。

「それで。切子さん？」

口火を切ったのは万里だった。

「その、装置っていうのは……」

その時だった。

突如として応接間に現れたのは、筋肉隆々の大男。忠人よりももう一回り大きな体に、もう一回り筋肉質なその体付き。異様なまでに「濃い」顔付きは、どことなく紳士然としていて、まるでなんか漫画から出てきたみたいだった。

「紹介するわ」

にこにここと、切子は大男に右手を掲げた。

「『動物を擬人化させる装置』をグレートアップさせた『物体を擬人化させる装置』によって擬人化させた『物体を擬人化させる装置』よ。よろしくしてあげてね」

なんだ……いったいそれは……。万里は訳が分からず絶句する。

……鏡に向けて光線を放ったとでも言うのだろうか……。

「ハイボーイ」

うるたえる万里の前に、大男は容赦なく立ちふさがった。

「ちよつと個人的に話がある。こっちに来てくれないかい？」

陽気なその声とは裏腹に、男はすさまじい力で万里を持ち上げた。「ばんり！」心配げに立ち上がるゴキ子を片腕で制し、大男は万里

を応接間の外へ担ぎ出していく。「うおお？ おお？ おおおおう  
おう！」叫ぶ万里。精一杯に抵抗するが無駄である。

最終的にたどり着いたのは切子の部屋で、万里も何度か尋ねたこ  
とがある。子供部屋にちらかるおもちゃみたいに、乱雑に並んだ品  
物は、彼女の作った装置だろう。万里は今までに味わって来た数々  
の地獄を思い出す。

「ほらよ」

乱雑に床に転がされ、万里はその場でも席をする。「ちょっとあ  
んた……何をするんだ！」抗議の声をあげた次の瞬間には、大男の  
いかつい顔が目の前にあった。

「ちょっとあんたに……シビアな話をしなくちゃならねえ」

大男は真剣な顔でそう呟いた。

「一目見て分かったんだが……あのゴキブリのお嬢ちゃん。あれ  
を元の姿に戻すのは、今の俺ではもう無理だ。人間になって時間が  
経ちすぎちまつてる」

それを聞いて、万里は少し安心したような気持ちになった。大男  
はそれを見透かしたように目を細めると、唇を歪めながらこう続け  
た。

「そしてあんたはあのお嬢ちゃんに、どうやら情が移つちまつて  
る。気持ち的にも、そう簡単には元の姿には戻せないだろう。しか  
しずっとあのままでいる訳にいかないのもまた事実だ。そうだろう  
？」

そのとおり。万里は頷いた。

彼女を部屋で養える期間にも限度はある。だから、万里は切子に  
ゴキ子を元に戻す装置を作ってもらわねばならなかった。唯一不備  
があるのだとすれば、当のゴキ子の了解を得られていないというこ  
とで……。

「ボーイ。そこでだ」大男はにがりを帯びた声で語りかける。「  
この俺がお嬢ちゃんを元の姿に戻せるようになるまで……キリコが  
俺を完成させるその時まで、どうするべきかをちゃんと決めてお

け。そして何より、その先の覚悟を決めておくんだな」

「その先の覚悟って……？」万里はそこで目を丸くした。大男はそれに答えずに「ほら行くぞ。あんまりキリコに心配かけるな」と乱暴な声でそう言った。

万里は再び担ぎ出された。「うわあああああ！」声をあげるが大男は少しも容赦してくれない。どたどたと応接間に運ばれて、ソファの上に乱暴に転がされた。

「ばんり！」

飛びついたのはゴキ子だった。取って食われるとでも思っていたのだろうか、心底安心したような顔で飛びついて来る。自分を心配してくれていたのだろうか、無垢なその顔がいとおしく、絶対に手放したくないと思えてしまう。

「話は終わった？」

キリコが尋ねた。万里は神妙に頷いた。

「その子は？ 元に戻せるの？」

これに首を振ったのは大男だった。「ふがいねえ」一言そう呟いた大男に、切子は何も言わずに手鏡を掲げてみせる。すると大男は手先から青とも紫とも着かない色の光線を発射して、鏡に反射させて自らそれを全身に浴びた。不思議な光線に全身を包まれしばらくすると、その場から消え去った大男の代わりに、小さな水鉄砲がその場に出現したのだった。

「ちよつ。何っスか今の？」

忠人が興奮した面持ちで立ち上がる。

「消えた？ 謎のマッチョ消えた？ どういうこと？ 何、今の？」

「手品よ。すごいでしょ」

そう言つて切子はこころ笑う。

「マッチョさん消失トリック。今まで一度も見破られたことないんだから」

すっげーな今のすっげーな！。タネ教えてくださいよ、タネ。そ

んな風に捲し立てるこの友人が、本物のバカで良かったと万里は思う。からかうような顔をして忠人の相手をしている切子に向けて、万里は一言こつたずねた。

「今……どうしてマッチョを消しちゃったんですか」

切子はちよつと寂しげに、そして心配げな瞳で万里を見詰めながらこつ答えた。

「情が移るとね、困るからよ」

旅行をするぞ、とそう言われた。

付いてくるかどうかは自由だ。万里と、それからゴキ子の。

ゴキ子を元に戻す装置については、着々と製作が進んでいるらしい。もうほとんど仕上げの段階に入ってしまったていて、旅行から帰ってすぐに完成させるということだ。

それがどういうことを意味しているのか、分からない程万里は鈍くはなかった。だけれどその意味をゴキ子に伝える程の勇氣は万里にはなく、ただ「遠くの方に、一緒に遊びに行きたくないか？」とだけゴキ子に伝えた自分を卑怯者だとも思う。

そんな訳で。万里とゴキ子と忠人の三人はそろって切子の車に乗せられて、目的地の海に連れて行かれていた。助手席には立候補者の忠人が乗り込み、ようやく心を開きつつあるゴキ子と万里が後部座席。運転手を務めるのが十九歳の切子であつて、万里にはこれが酷く心配だつた。

「運転、できるんですか？」

「あたぼうよ。つていうかこの車放つておいても目的地付くし」

「……どういうことですか？」

「目的地までの距離を計算して、両翼生やしてジェット噴射で一つ飛び。成功率は……試してないから分かんない」

改造車なんて問題ではない。「やってみよー！」ほざく切子を必死の懇願でやめさせて、たどり着いたのはおしゃれな別荘。切子の父親の持ち物なのだそうで、やって来るのは万里も二度目。「すつ

げーなあおい」「ばんりーおつきーよー。おいしものあるー?」「忠人とゴキ子は楽しげに騒いでいた。

「部屋。あんたはゴキ子ちゃんと同じとこね」切子は人差し指を振ってからこう言った。

「はあ。でもどうして?」

「どうせ今までも同じ部屋で寝てたんでしょ? どっちにしたって、ゴキ子ちゃんまだまだ危なっかしいし、ちゃんと見てあげなくちゃ」

それはそのとおりだ。万里としても、彼女から目を離さずに済む方が良い。このように高い階のあるお屋敷なら尚更である。

「ええ! っことは切子さん。万里とゴキ子ちゃんが一緒の部屋ってことは、残ったおれ達二人も同室ってことですか?」

忠人がやけに嬉しそうに戯言をいい、切子は「うふふっ」と楽しげに笑う。「そうね。おねーさんが色々教えてあげましょうか。今夜は寝かさないわよ」「うっひょう」「やめい」

万里が二人を突き放すと、冗談だよ、切子は楽しげに哄笑し始めた。それに追従するようにして、ばかだなー万里はーと笑い始めた忠人の目に、若干本気で残念がるような色が浮かんでいたことを、万里は決して見逃さなかった。

海で遊んだ。貸し切り状態の穴場ビーチである。

視界一杯を水平線まで覆い尽くすただっ広い海は、太陽の光を反射してきらきらと光り輝いていて美しかった。

「わあああああ」海を見るのは初めてなのだろう。透明な瞳に輝く青色を一杯に写し、無垢なる声でゴキ子は言った。万里はこの時もせっかく着替えさせた上下の水着を脱ぎださないかどうかひやひやしていたが、綺麗な海に目を奪われてそれどころではないらしい。

「きれいだね! ばんり!」ゴキ子は指差しそう言った。万里は大いに微笑みながら頷くと、「近くに言ってみようか」とそう提案した。

待ち切れないバカの忠人は既に海に向かって突進していたし、遅れる訳にもいかなかった。「うんっ」元気なゴキ子が頷いて、二人は海に向かってかけ始める。全力で走れば流石はゴキブリ、五十メートル七秒半の万里よりずっと素早い。

しかしゴキ子は海の前まで来るとそこで不自然に急停車。砂浜に足をめり込ませながら静止する。「どうした？」万里が訊くと、一言「みず」とそう答えた。なるほどこいつは水が苦手なのだった。

万里が苦勞させられるのは、風呂に入ることさえ嫌がるという点だった。頭を自分で洗うこともできないし、どうしてそんなことをするのかその意味さえも分かっていない。そんなゴキ子に泡塗れになることを強いるのも、なんとなく心が痛む万里だったが、不精とはこの世でもっとも恨むべき物の一つであるのでそうもいかない。

「ふぎやあああつ」と、そこで大きな波が訪れてゴキ子の体をさらう。「へるぷ！へるぷ万里！」言いながらもがき苦しむゴキ子を救い出し、砂浜に立たせてやる。ゴキ子は何かの漫画で覚えたのだろう、ぴしっの間抜けな敬礼をかまし、「辞退させていただきます！」叫ぶようにそう言って砂浜を走り抜けた。

「何。あの子、泳げないの？」  
忠人が心配そうにそう尋ねた。万里は肩をすくめ、頭を振ってから首肯する。水に慣れるには良い機会だと思っただが。

砂場遊びを教えると、ゴキ子は今度もその素晴らしい芸術的感性を発揮した。海を背後に仁王立ちにかまえるちよつと冴えない男の面は、どこからどう見ても万里にしか見えなかった。

「才能あるわね」  
遅れてやってきた切子が言って、頭に気の棒を刺したり遊び始めた。きやつきやと笑いながらゴキ子がそれに参加する。全身に木の棒が刺さり口から血のような液体を垂らし、下半身に不自然な突起を生やした己の象徴を見て、万里は思った。

頼むから、やめてくれ。

「今日は楽しかったねー」

言いながらゴキ子はリバーシの角を奪った。これで万里の逆転の目はほとんど潰えたと言っても良い。

別荘の部屋はそれなりに広く、若干の掃除で対処できる程度には清潔だった。ゴキ子が自らの料理の腕を振るいたいと言い出すのをどうにか制して食事を済ませ、ある程度皆で騒いだ後で、部屋に戻った二人が眠る前に始めたのはリバーシだった。

楽しげに笑いながら、リバーシ覚えて十分のゴキ子は万里の白を自らのシンボルカラー、艶のある黒に変えていく。まったくどうしてこいつは本当、色々な意味で物覚えが早い。

「あはは。ばりりよわー」十分前に覚えたリバーシで、ゴキ子は万里に全滅勝ちを決めてしまった。「角あげよっか？ 四つともぜんぶ」それは流石にプライドが疼く。

「おまえはすごいなあゴキ子」万里はしみじみとそう言った。「もう大分、今の生活にも慣れてきたんじゃないのか？」

「今の生活って？」ゴキ子はちよんと首をかしげた。

「人間の生活だよ。もう大方のことは覚えてたんじゃないのか？」

学校に行くにはちよっと早いけど、おまえならきつとすぐに馴れるよ」

懸念すべきだった人嫌いも、最近は解消の方向に向かっている。毛嫌いしていた忠人とも飴ちゃんもらって和解していたし、もう自分が心配することも、そんなになんじやないかと思えて来る。

「人間の生活……」ゴキ子は首をかしげたまま「そうだね。馴れたってどうか……」

「どうした？」万里が問う。ゴキ子は少しだけ複雑な声色で答えた。

「あのね。わたし、前の姿だった時のこと、本当はあんまり覚えてないの。毎日すつごく暗いところにおいて、怖くて寂しくて心細かったのは覚えてるんだけど、それだけで」

「……そっか」万里は言った。「なあゴキ子。ちよっと相談があ

るんだ」

「なあに？」ゴキ子は目をぱちくりとさせてみせる。万里は意を決してこう口にした。

「前にゴキブリだった頃と、人間になった今と、おまえはどっちが良いと考える？ もしもそれを選べるならば、おまえはいつたいどっちを取るつもりなんだ？」

その時だった。

万里の脇に取り付けられた扉が不自然に開き、そうしてできた隙間から、何やら茶黒いものが放り込まれた。

茶黒いものは万里の眼前を通り抜けて彼の足元に着地した。特徴的な日本の触角に、艶のある体にわさわさとした三対の足。呆然としてそれを見詰める万里がその正体に気付いた時には、全身が震えてその場を立ち上がっていた。

「ばんり？」

ゴキ子が声をあげる。飛び上がった万里の目に、部屋に備え付けられた鏡の様子が見えた。自分でも驚くほどに情けない、蒼白で冷静さを欠いたその表情。世にもおぞましいものを見たようなそれは、間違いない。今すぐにでも殴ってやりたくなる、酷薄で卑劣な自身姿だった。

「いやあ。引っかかった引っかかった」

僅かに隙間の開いていた扉が開放されて、中から出て来たのはほっこりとした表情の忠人だった。得意げに床のゴキブリを拾い上げ、顔を青くする万里に向かって突きつける。

「おもちゃだよおもちゃ。パーティグッズ。おまえ去年もこれに引っかかったよなー、学習しろっての。あはははは」

あははは。あははははは。はは……。と、同調して笑うものの存在がないことを悟り、忠人はぎよっとして口を閉じた。万里は思う。こいつは悪くない。やらかしたのは他でもないこの俺だ。彼女のことを本当に思っただけなら、このような失敗を犯すはずなかったのだ。

万里はゴキ子の顔を見る。力なく座り込むゴキ子の瞳は、信じられないくらいどす黒い、不安がるように万里の方に向けられていた。

それからのことは思い出したくもない。

あれから切子の別荘で、帰宅の車の後部座席で、万里はゴキ子に何度も声をかけた。それに答えるゴキ子の声に覇気はなく、暗い瞳はずっとそのままだった。

家に帰り着いて、リビングのソファで頭を抱える。妹のように可愛がっていた女の子を、あんな形で裏切ってしまった重圧は、十四歳の万里には耐えがたいものだった。

体がだるい。溶かした鉛が全身を駆け巡るような不快感が身を覆う。いつそのまま消えてなくなってしまうば楽なのだろう。ゴキ子と過ごした夏休みの記憶を、そのことごとくをなかつたものにしてしまえば、こんな重圧からも開放される。しかしそうしてしまうには万里の中でゴキ子の存在は大きく重く、その思い出は手放しがたいものだった。

万里はだらりと立ち上がり、自分の部屋へと向かって行った。何が万里をそうさせたのかは分からない。再びゴキ子と向き合おうと思ったのか、それともただの惰性だったのか。自室に入って万里が最初に気付いたのは、開かれたガラス戸と消えてなくなったゴキ子の存在だった。

「……ゴキ子？」

万里はぞつとした。それから夢中で家中を探し回った。だけれど万里を安心させる無邪気な微笑みはどこにもなくて、自分の失ったものの大きさに、万里は改めて打ちひしがれる。心の中にぽっかり開いた喪失感の底なしで、幼い万里を内側から飲み込んでしまいうな代物だった。

「ちよつと良いかしら」

部屋から声がした。

ぶらぶらと自室に戻ると、そこに立っていたのは水鉄砲の装置を

手にした切子だった。彼女はまず万里の表情を見てぎよつとすると、何かを悟ったような表情でこう口にする。

「……ゴキ子ちゃんは？」

「もういない」

万里は答えた。

それから万里は泣くようにして自分の失敗を話し始めた。自らの卑劣さ、酷薄さを嘆くかのように打ち明けて、ゴキ子に抱えさせてしまっただろう悲しみと不信感のことを口にした。切子はその一つ一つを丁寧に頷いて聞き入れて、それから慈愛に満ちた声でこう言った。

「大丈夫。まだやりなおせるわ」

その一言が、万里の心をどれだけ救ってくれたことか。顔をあげれば、幼い頃から見知った顔が、どこか責任を感じたみたいに歪められていた。

よつぽど心配をかけていたのだと思う。万里にゴキ子を与えたのは切子であって、こんな事態をずっと気にかけていたに違いない。切子にこんな表情をさせてしまう自分がふがいなかった。

「だけど。ちよつと怖いことを放さなければならぬの」と切子は言った。

「……なんですか？ それ」

「タイムリミットの存在が発覚したの」切子は万里を諭すような慎重な話し方で「多分、もう時間ぎりぎり。あのね、あの装置には時間制限があつたの。あれで人間にした生き物は、ある程度時間がたつと元の姿に戻ってしまう」

万里ははつとして顔をあげた。「ってことは……」

「ガラス戸を開けることができたってことは、この部屋でゴキブリの姿に戻った訳ではないと思うわ。だけれど、尚更良くないわよね。万が一外で元の姿に戻ったりしたら、もう、見付けるのは絶対に不可能だわ」

跳ねるようにして万里は立ち上がり、靴も履かずにガラス戸をく

ぐるうとした。夢中で先へ進もうとする万里を、「待って」と切子は引き止める。

「あんた達のことは忠人くんも心配してたわ。なんだか様子がおかしいって……あたしもそれを見ていたから、どういふことなのかと思っただけだけど……良いこと」

切子はどこか、万里を叱るような険しい顔でこう言った。

「あの子にあつたら。真っ先にあんたの思いをぶつけなさい。あの子はどんな言葉の本質だって、簡単に見抜いてしまう子だから。」

……一番伝えるべきことを言うの。そうしないと、意味がない」

それを訊いて、万里ははっとした。別荘の部屋で、車の中で。万里はゴキ子に何を伝えてきただろう。あの時の失敗を弁解するような発言もした。彼女を元気にさせようと楽しい話もたくさんした。しかし、それがいつたい何になるのだというのだろうか。

「分かった」万里は言った。「行つて来る」

裸足のままで走り出した万里の姿を、切子はまっすぐ見詰めていた。

最初に思いついて向かったその場所に、ゴキ子はちゃんといてくれた。

「……ばんり？」

振り向いたゴキ子の瞳は黒く濁って、それが万里には痛ましかった。思わず目をそむけてしまいそうになる。

それだけ自分のしたことは、ゴキ子の心を深く抉つたのだ。いたたまれずにこんなところに逃げ出して、彼女はいつたい何を思ったのか。

ゴキ子がいたのは二人が溺れた川岸だった。ゴキ子が三人の男に囲まれていて、川に飛び込んだ橋の下。

「ゴキ子。聞いてくれ」

どこまでも虚ろな表情で、ゴキ子は万里をじっと見ていた。不安がるようなその瞳には、万里に対する不安や恐怖、無邪気な愛情が

たつぷりと込められている。万里はそれを真つ向から捕らえながら口火を切る。

「おまえがゴキブリだったって、そんなことは俺にとっちゃ関係ないんだ。おまえには俺と一緒にいて欲しい」

彼女の前でもちやのゴキブリを怖がってしまふ万里が、それでも彼女に伝えなければならなかった。彼女の返事を待たなければならなかった。そうしなければ、これまでゴキ子と過ごして来た夏の思い出が、虚しくも消えてしまうようなそんな気がして。

「本当にごめん」

万里は言った。そして腹の底からこう叫ぶ。たいそう歪で偽善的なその気持ちは、それでも伝えるべき万里の心からの想いだった。

「俺はおまえのことが、一番好きなんだ！」  
そう言った瞬間。

ゴキ子は薄く微笑んでくれたのか。綺麗な瞳を取り戻してくれているのか。それとも万里に憤り、彼の軽薄を尚責めたのか。そんなこと、今となっては分からない。万里がそう口にした瞬間、川端に少女の姿はなかったからだ。

ただ、彼女の身に着けていた衣類がちらかり、一匹のゴキブリが静かにその隙間から這い出した。

靴を履いていなかったことに気付いたのは、帰り道でのことだった。

途中で何を踏んだのか足の裏からは妙な出血が二箇所もあって、ずきずきとしたその痛みに、万里は少し泣きそうになる。元の姿に戻ったゴキ子を手の平に乗せて、自然歯を食いしぼるような表情を浮かべた万里の姿は、さぞかし不気味に見えたとはいえない。

家に帰りついた頃には見上げる空も夏の夕焼けに染まっていた。まばらにすれ違う人々は誰しも万里に振り替わり、しかし万里はそれに気付かない。彼の注意はただ一つ、自分の手元で蠢いているかつて少女だったものに向けられていた。

不思議と嫌悪感はなかったし、むしろ愛しいもののように感じられた。もしも、このゴキブリを少女の姿に戻せなかったとしても、思い出を胸にこのゴキブリと暮らしていたと思えるほどに。

「あら。万里じゃない。どうしたのそんな顔で」

家の玄関のノブを引き、鍵も持たずに出て行ったことを思い出していた、その時だった。

「母さん」

予定よりもずっと早い帰宅だ。万里は思った。出張に行っていた母親の美恵子。ぼろぼろの息子に心配そうな目を向けると、安心させるようににっくと微笑んだ。

「あんたも大分男らしくなったね」

息子を激励するようなその声は、頼れるかーちゃんそのもので。

「昔はこんなの、触ることもできなかったのにね！」

万里の手の平からとりあげたゴキ子を、頼れる母は強引に指先で握りつぶしてから、地面に向かって叩き付けた。

あまりのことに、万里は二の句が告げずに停止する。暖かい我が家に戻ったばかりの彼女は上機嫌に扉の鍵を開け、哄笑しながらこっぴどく口にした。

「母さんがこんなに早く家に帰れたのって、ほとんど奇跡みたいなもんなのよ」

晩御飯はカレーだった。母特製の。

喉を通らないことは考えるまでもなく、万里は親不孝にもその夕食を辞退した。心配げに自分を覗き込んでくる母親の視線から逃避して、たどり着いた自室には潰れ掛けたゴキ子と切子がいた。

「ガラス戸」切子は言っつて、万里に水鉄砲を手渡した。「無用心だよ」

万里は水鉄砲を受け取ると、切子の方をすがるような目で見詰めた。切子はどこか申し訳なさそうに悲しげな溜息を吐く。切子のそんな様子が万里には酷く胸に堪えた。

「無理だね。流石のあたしでも死んだ生き物は蘇生できない」切子は苦々しく呟くように口にした。「あたしはもう行くね」意を決したように万里に背を向ける。万里には分かっていた。彼女がどれだけ葛藤し、どれだけ自分を心配しているのか。

最後の時間を与えることを、切子は相当に躊躇したことに違いはない。しかし悩んだ末に切子は万里に装置を渡した。万里が自分で決めると、そんな風に。

万里は水鉄砲を手にとつて、ほんの一瞬、躊躇してからゴキ子の方にその先を向けた。引き金を引くと、青とも紫とも言えない不思議な色の光線が瞬き、ゴキ子の全身を包み込んでいく。そして気が付いた時には一人の少女が、全身をひしゃげさせ、世にも無残な姿で畳みの上に出現したのだ。

「……ばんり？」ゴキ子は息も絶え絶えにそう口にした。それからぐちゃぐちゃになった体をよじつて、万里の姿を捉えようとする。そんな様子に、万里はほとんど泣きそうになった。

「……ありがとう……ゴキ子」万里は言った。最初にそんな言葉が飛び出すとは、万里自身も予期しないことだった。「楽しかったよ。……本当に楽しかったんだ。おまえといると」

「ねえばんり」ゴキ子は言った。「あの時、あんなに早くわたしを見付けてくれたよね。……嬉しかったんだよ。……もう終わりかもしれないって、どうして逃げてきちゃったんだろうって、そうやって後悔してたから。……もう相手にしてもらえなかったらどうしようって、すつごく怖かったから」

万里は胸が痛かった。自分がそんなことをする訳がないじゃないか。だがしかしそれだけの不安を万里はゴキ子に与え、その結果としてこんな残酷な結末がある。それを思うと、万里はとうとうこらえ切れずに涙を流した。

「ばんり。……わたしね。ずっと探してたの。真っ暗でほとんど何も見えない、どこを見渡しても味方はいない。ゴミの中で、便所の中で、自分を愛してくれる人をずっと探していたんだと思うの。」

あの姿だった時のことは……本当にそれだけ覚えてる。だから」

ゴキ子はゴキ子の瞳は限りなく透明だった。これから死に逝く者とは思えない、限りなく純粹で透明なその瞳。吸い込まれそうなその瞳には、確かな愛情と思いやりだけが備わっていた。

「だから。わたしはとつても幸せなんだよ。ありがとう、わたしを愛してくれた人。あなたはこれからたくさんの人に出会って、たくさんの人に愛されて、たくさんの人を愛して生きてください。そんな幸せな人生が、あなたにはきつと訪れると思う。だけれどばんり、きつとわたしのことは忘れないでね……」

「忘れないよ」万里は言った。流れ落ちる涙は無様なばかりで、不明瞭な視界でただただゴキ子を捉えていた。「愛してる。忘れない。おまえのことを忘れない。忘れない……」ただただそれを繰り返す。散り際でこれだけ多くを伝えられるゴキ子と違って、万里は幼く弱かったから。ただただ何度でも、何度も何度も言っつてやる以外、彼には何もできなかった。

綺麗な瞳で満足そうに微笑んで、少女の姿は霧散していった。夕日が差し込むその部屋に見えるのは、一匹の死に絶えたゴキブリの姿と、打ちひしがれて泣いている一人の少年の姿。

開いたガラス戸から一筋の風が吹き込んで、そこで万里は、その風が少し涼しくなっていることに気付いた。

(後書き)

読了ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8564z/>

---

コックローチと恋心

2011年12月26日23時47分発行